



授業に役立つ図書館情報！

NO.21

読書推進委員会

「課題図書」とは？

毎年、5月になると書店の店先にズラリと並ぶ課題図書。けれども、課題図書って一体、誰が誰に向けた課題なんだろう？そう思われる方が大半だと思います。課題図書の選定は、「全国学校図書館協議会」というところが行っています。選定基準は、新しく出版された書籍であること（1～2年以内）。その学年の児童の成長・発達に応じた内容であること。その学年の児童の学習に応じた内容であること。人を大切にしている内容であること。情報が正確であること。このような条件を念頭に、本の専門家が選んで決めます。課題図書について、子どもたちに分かるように説明し、短時間で読めそうなものがあれば、ぜひ読み聞かせをしてください。高学年は、全部読み聞かせるのは難しいので、内容をブックトークの形で紹介したり、本のはじめの部分を読み聞かせたりするとよいと思います。

低学年：『あなふさぎのジグモンタ』…新しい世界へ踏み出す勇気をくれる絵本。

ジグモのジグモンタは、「あなふさぎや」をしています。洋服に開いてしまった穴をふさぐ仕事です。でも、この頃はみんなせっかちで、すぐに新しいものを欲しがります。「穴ふさぎなんて、もう役に立たないんだ」。気落ちしたジグモンタは、気晴らしに森に出かけますが…。

低学年：『そのときがくるくる』

だれにでも きらいなものってあるよね。きみは どう？ぼくは あるよ。どうしても 食べられないもの。「いまはきらいでも、いつかきっと おいしく食べられるときがくるさ」って おじいちゃんは いうけど…

低学年：『みずをくむプリンセス』

あさはやく おきて、ぼんやりしたまま したくして、つぼを あたまに のせる。ずっとずっと とおくまで、きょうも わたしはみずを くみに いく。「ねえ、どうしてうちにはみずがないの？」これは、アフリカの、ある水くみ少女の1日。少女の願い——それは、だれもが、いつでも、きれいで安全な水を使えるようになること。

低学年：『どこからきたの？おべんとう』

農家さん、漁師さん、配達員さん、スーパーの店員さん、お母さん…みんなの愛情、いっぱい詰まってる！おべんとうには卵焼き、アジフライ、ポテトサラダなど、おいしいものがいっぱい！ でも、どこから来て、どうやって食べられるようになったのかな。

中学年：『わたしたちのカメムシずかん：やっかいものが宝ものになった話』

「カメムシ」と聞くと、どんなことを思い浮かべますか？ おそらくあまり良いイメージはもっていないのではないのでしょうか。でも、じつはカメムシには、美しいものや、かわったかたちのものなど、いろんな種類がいて、よく見ると、なかなかおもしろい生きものなのです。岩手県葛巻町にある小学校で、そんなカメムシをみんなでさがして、調べて、「カメムシずかん」まで作ってしまったお話です。

中学年：『ゆりの木荘の子どもたち』

ゆりの木荘は、100年以上も前に立てられた立派な洋館。いまは有料老人ホームになり、ツバキさんやサクラさんたち、6人の老人が住んでいます。春風が吹くある日、サクラさんはだれかが歌う手まり歌——時々聞こえる歌——を耳にします。ツバキさんにいわれるまま、サクラさんがその歌を口ずさんでみると、ふたりは突然、子どもになってしまいました。そう、87歳のおばあさんではなく、10歳ばかりの女の子に……。

中学年：『ぼくのあいぼうはカモノハシ』

道で出会ったカモノハシがオーストラリアに帰りたいて。どうすればいい？ バス？ 船？ 飛行機？ ほのぼのとした冒険物語！

中学年：『カラスのいいぶん：人と生きることをえらんだ鳥』

身近な鳥、カラス。ごみをちらかす、黒くて不吉、大きくてこわい……などわるいイメージばかり。でも、本当はどんな鳥なのでしょう？

高学年：『エカシの森と子馬のポンコ』

牧場から逃げ森で暮らす子馬のポンコ。長老の木・エカシ、不思議なカメムシたちとの毎日で少女から大人へ。美しく繊細な物語。

高学年：『サンドイッチクラブ』

珠子はダブル塾通いをする小学6年生。ぼんやりむかえた夏休みに、無心に砂像を作るヒカルと出会う。強烈な個性をもち、成績もトップクラスのヒカルは「戦争をなくすためにアメリカの大統領になる」という。家庭環境も性格も異なるふたりの少女が、たがいを受け入れ、まっすぐに世界と向きあっていく姿をさわやかに描く。

高学年：『おいで、アラスカ！』

転校してきたスフェンはパーケルをからかうイヤな男の子。だが昔飼っていたアラスカがスフェンの介助犬だとパーケルは知り、取り戻そうとスフェンの家にしのびこむが……。

高学年：オランウータンに会いたい

インドネシアに生息するオランウータン。熱帯雨林保護のシンボルになっているものの、野生での行動はほとんど明らかになっていません。20年近くオランウータンを追いつける著者は、時には20メートルを超す巨木に登り、時には夢中で追いかけてジャングルで迷子に。オランウータンの思慮深い目に魅せられた著者が、霊長類研究からわかった未来を作る知恵を、魅力的なフィールドワークを通じて伝えます。